

大阪自然教室の暑い！熱い！夏。

ダイーンズ・メッセージ

石元佳奈子

from はらっぱ

Vol.131

「大阪自然教室」は1973年秋、自然保護団体「関西市民連合」で活動していた20代前半の若者たちによって、子どもを対象とした自然観察会として設立された。自然を頭で理解するのではなく、五感を通して自然の楽しさを体感する、そんな「大阪自然教室」に小5のときに入会し、今年には会員からリーダーと呼ばれるようになった石元佳奈子さん(16歳)。教室で出会った人、こと、もの。自然と遊ぶことの楽しさ、大変さ(っ)を綴ってもらった。

大阪自然教室に出会ってもう5年目の夏が過ぎた。そのなかでたくさんリーダーのお世話になり、たくさんの人に出会ってきた。

大阪自然教室では、毎月1回の日帰りの例会と宿泊を伴う企画があるが、宿泊企画のなかで一番好きだったのは「熱田自然教室」。夏休みに兵庫県香美町の山奥にある熱田という、今はもう人の住んでいない集落の1軒を借りて、自然のなかで生活をする企画だ。そこには電気はきていないもの、すべて自分たちでやる共同生活だった。4泊単位で最長は24泊、対象学年は小6から中3まで、体力があれば小5でも参加できる。私は小6から中3まで毎年参加し、20泊した年もあった。

熱田、大好き！

食事はカマドで薪を焚いてつくるとし、お風呂も五右衛門風呂やドラム缶風呂だ。そのときに使う薪も自分たちで割る。ちなみに新割りは、作業のなかで常に一番人気を誇っている。トイレはもちろん水洗ではない。

「ぶらり」に「チョコ」チョコレートパーティー」という名の「ぶらり」の汲み取りもあるのだ。「三」は下の集落まで持って行くが、生「三」は家の近くに穴を掘ってそこへ捨てる。サラダに使うようなキュウリやミニトマト、アスパラガスというような野菜は、家の前にある畑で育てている。夜になれば満天の星空のもと大声で歌を歌う。周りに家がないので、気兼ねなく声を張り上げることができるのだ。道路に寝ころんで流れ星を探すこともある。それだけ長く流れていても、結局願いごとを言えたことはない。そ

〈熱田自然教室〉チョコレートパーティー?



れでも懲りずに毎回毎回流れ星を待つのだ。現実を忘れさせてくれるような生活が熱田にはある。
熱田ではすべてが楽しくなる。普通ならしんどいだけの新運びや穴掘り、畑の草抜きなどの作業も楽しんだ。ワイワイやっている間にもうお昼とき、なんて当たり前。みんな協力して作業を早くすませて、しっかりと遊ぶ時間をつくる。笑い声の絶えない楽しい毎日が続き、その分、大阪に帰るとき寂しさは大きくなる。そして私は、ホームシックならぬ、熱田シックになってしまっただけ、熱田が大好きだ。

「不自由教室」って何だ?

冬休みになれば、箕面の山にテントで泊まる「不自由教室」という企画がある。いつもはリーダーが決めた予定に沿って行動しているのだが、この企画だけは違う。3、4人で班を組み、それぞれ自分たちで泊る日の行動と食事を考えるのだ。もちろん、就寝時間や起床時間もすべて自分たちで決めていいのだから自

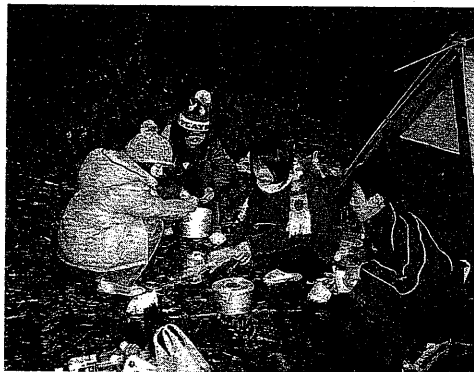
由のはずなのに、逆に何をすればいいのかわからない不自由を感じる。それが「不自由教室」という名前の由来だ。リーダーは同行するのみ、手助けもアドバイスもしてくれず、私たちがどんな失敗をするかおもしろそうに見ているだけ。料理がうまくいかない私たちが横目、手早く料理しておいしそうに食べている。

冬の山は凍えるほど寒く、朝起きてテントを出ると、一面銀世界というところもあり、「熱田」の経験がある中学生しか参加できない。私は3年連続で「不自由教室」に参加した。3回とも完璧な泊り日ではなく、思い出しても笑えるような失敗があったものの充実していた。内容も年々進歩していったと思う。この企画では遊んでもらうだけの会員時代に、ほんの少しだけリーダーの大変さを味わうことができた。

今度は「ぶらり」旅

春休みには、体力のある小6から中3までを対象とした「ぶらり旅」という企画がある。リーダー2、3

人と会員5〜8人が、大きなリュックにテントや調理器具なんかをつけて、できるだけお金をかけずに青春18切符やフェリーを利用して、その名のとおり、ぶらりと旅をするのだ。何よりも大切に行っているのは、行った先での現地の人との交流。テントを張らせてもらうためにいろいろ交渉をしたり、畑仕事をしている人に話しかけて晩ご飯のおかずをゲットしたり。
会員最後の企画となった中3の「ぶらり旅」は五島列島だった。現地では5泊中、テント泊はたったの2回



〈不自由教室〉いてつく寒さのなかで

不自由教室

from

Vol 31

〈ぶらり旅〉波止場で調理中



3泊は地元の人々の好意で公民館や家に泊めていただいた。「タツ」で朝飯という「ぶらり旅」では考えられないこともあった。それに、向かう子どもたちも仲よくなった。夜になると一緒に散歩に行ったり、早朝には釣りもした。結局、魚は一匹も釣れなかったが、全然苦にならずに早起きだった。

その前の中2の「ぶらり旅」は伊豆諸島だった。現地での3泊は、環境保全のためキャンプ場にしか泊まることはできなかったが、温泉に入る放題で、すくくお風呂に焼けた。魚を

釣って食べたこともあった。中一とききは瀬戸内海の屋代島へ行って、島のあちこちで3泊した。地元の人にミカンの木を植えさせてもらった。3年で食べられるようになるというのであったので、「ぶらり旅」をまかせてもらえるリーダーとなって、今度は会員を連れて食べに行かねばならない。小6のときも瀬戸内、去予諸島の3つの島を回った。そのとき、浜辺で遊んでいる所へ、ミカンがコンテナに入って流れてきたのがすごく思い出に残っている。そのミカンはもちろん、ありがたかった。

「ぶらり旅」はどれも一番楽しかったとかの順序づけができないくらい、どれも楽しく思い出深い。あのときあんなことがあった、なんて一緒に行った人と話すこともまた楽しいものだ。そのときの写真を取り出してきて、思い出を話せるのもいい。これも思い出の宝庫。

リーダーとしての初めの一歩

4月から高校生となり、会員から

リーダーになって半年が過ぎた。クラブは日曜日を拘束されない剣道部のマネジャーを選んだ。夏休みの企画も、初めてリーダーとして参加した。

今年の夏の企画は、鳥取県智頭町での小2〜小5対象の「智頭自然教室」、小4〜小6対象の山口県上関町の「祝島自然教室」、中学生対象の高知県四万十市での「四万十自然教室」、それに「熱田自然教室」だった。私は「智頭」と「熱田」に参加することになった。自然教室全体の会議だけではなく、それぞれの企画ごとに会議があるため、夏が近づくと会議の数はだんだんと増えていった。その間、遊びのネタがほとんど浮かばず、年上のリーダーがどんどん出してくるアイデアに圧倒されるだけだった。

そんななか、下見だけはできるだけ行っておこうと思いい、6月の下旬と7月の中旬に智頭町へ行った。フィールドのポイントや道を覚えたり、メインリーダーに頼まれたことを確認した。特に「智頭」では川遊びが

重要なので、川の深さや流れを確かめるために泳いだり、川への道をつくるために草刈りをした。
そして8月2日から4泊5日「智頭」に行ってきた。小学生向けの企画はともすじぶりで、とりわけ、自分たちでご飯をつくらなくてもいいということに、なんだか変な感じがした。「例会」での担当学年の小5はひとりしかおらず、顔すら知らない子たちばかりで、集合場所ではすごく不安になった。とりあえず、バスのなかで隣に座った子どもとは仲よくなり、その後もだんだんみんなと打ち解けていった。子どもたちも子どもたちで、会員外の子もいたり学年がバラバラであるのに、早々に仲よくなっていた。

そんななか、竹や木で細工物をするとき、私は女の子ふたりとバードコールづくりに挑戦した。少し太めの木の枝にドリルで穴を開け、それより少し大きめのボルトを穴にねじ込むという、とても簡単そうなのに、方だった。しかし、いざつくってみると、全く音が鳴らない。見本

して持って行ったバードコールと見比べたりして、いろいろ実験し、松ヤニを穴とボルトに塗りたくってみた。しばらくすると、一か所だけ「キユッ」と音が鳴るポイントが生まれたりした。少し希望が見えたみたいで、より一層作業に励んでいた。つくり始めたとき、音がなかなか鳴らないので、女の子たちはすぐに飽きてしまっただろうと思っていたのだが、意外にもふたりはがまん強かった。最後には粘り勝ちで、か細いながらもきちんと鳥の音がするようになっていった。それが鳴った瞬間、ふたりはとてもいい顔をしていた。最後の子ども笑顔には、やってよかったと思えるものがあった。

さて次は「智頭」の2日後に始まった「熱田」。今年は10泊だったが、小6のときから毎年欠かすことなく参加しているこの企画にリーダーとして参加することに少し不安はあった。気持ちや行動が会員の頃に戻ってしまったのではないかと思ったのだ。熱田での生活では「リーダーになつたな」と思っているのが多々あった。

でもそれは、精神的ではなく物質的なものだ。たとえば、荷物を置く部屋が「子ども部屋」ではなく「リーダー部屋」になったこと。就寝時間が9時でなくなり、毎晩のリーダー会議に参加して、その日の反省と翌日の打合わせをすることなどだ。精神面では、ちゃんとリーダーとしてできていたかわからないが、自分としては精一杯がんばった。昔から仲のいい会員と一緒にいると、確実に自分が子どもに戻ってしまったので、あまり長いこと一緒にいないようにした。

そして、会員たちが鉢伏山の十字路でテント泊するとき、高校生リーダー4人はそこからさらに高い氷ノ山へ登ることになった。年長のリーダーふたりに連れられて、会員たちより早く出発した。ザックの背負い方など、山登りの基礎的なことを教えてもらいながら登った。ひとりは十字路に着く前に体調が悪くて山を下りた。もうひとり足は水源で水を汲むときに足を滑らせ、2メートルほど滑り落ちて捻挫し、後ろの会員

たちと十字路に泊まることになった。その他にも、頂上目前での突然の雨など、ハフニングは続いた。

十字路からの500メートルが一番辛かったが、それも乗り越え、予定時間どおり頂上に着くことができた。そのとき口から出てきた感想は、登頂に成功した感動とかではなく、「しんどかった」とか「早く帰りたい」だった。びしょ濡れになった服や靴下を眺めてはため息。明日またこの濡れた靴下を履くのかと思うと、気分は最悪だった。

がんばって登った頂上はガスが出ていてがっかりした。しかし、避難小屋の使用記録を見ていると、「ガスが出ているのに上空は晴れて星が見えた」と書いてあった。私たちはそれを期待して夜を待ったが、全くガスが晴れる様子もなかった。早々に寝た。そして、翌朝は田の出前に目を覚ますことができた。避難小屋の窓を開けると、眼下には雲海、前方には朝日が昇り始めていた。それはとてもきれいな景色で、早起きしてよかったと思った。

帰ってきてからの昼食は流しそめんだったが、疲れていたので流す元気もなく、普通に食べた。しかし、今まで食べたそめんのなかで一番おいしいものだった。そつえば、頂上で食べた臭のあまりないハヤシライスも、おいしく感じた記憶がある。

私にとって「熱田」の終わりは夏の終わりに等しい。今年の夏もまた、「熱田」とともに終わった。家にいることより、クラブや友だちと遊ぶことよりも「自然教室」をとった私の夏休み、一気に駆け抜けていった。会員時代よりも楽しめたように思う。リーダーとしての今年の夏は私を少しばかり成長させてくれたようだ。

(いしも・かなこ)



石元佳奈子さん。大好きな熱田のおっちゃん